

高等学校『家庭』の指導の工夫

- 中学校での学習を生かして -

大平雅子¹

中学校での学習を生かした高等学校での指導の工夫に重点をおき、中学校での評価規準の設定や評価法を参考に、高等学校での学習展開について検討した。また、新学習指導要領の趣旨を生かした年間指導計画、題材指導計画の作成とともに、「発達と保育」「服飾文化」のシラパスの作成を行った。

はじめに

平成14年4月、小・中学校においては新学習指導要領が完全実施となった。中学校での学習が高等学校に円滑につながり、生徒にとって一貫性のある学習となるよう、これまで以上に指導の工夫が必要となっている。そこで、本研究では、新学習指導要領の趣旨を踏まえ、中学校での学習を生かした年間指導計画と題材指導計画を作成するとともに、本年度より始まったいわゆる絶対評価による評価の取組を参考にし、各題材における育てたい力を明確にした評価規準の検討を行った。また、「家庭」に関する専門科目のうち、普通科高校等で、選択科目として多くの学校で設置が予測される「発達と保育」「服飾文化」を普通科の生徒が履修する場合を想定し、シラパスを作成した。

研究の内容

1 評価を生かした指導の工夫

平成14年2月、国立教育政策研究所より、小・中学校における評価規準・評価方法等の参考資料が作成された。高等学校についても、同様に、評価規準等の参考資料が検討されている。平成15年度からは、高等学校においても、新学習指導要領のもと、4つの観点による評価を十分に踏まえた評定を行うことが求められており、より良い評価に向けた工夫を行う必要がある。また、評価は指導に生かすために行うものであり、指導と評価の一体化を図ることが重要である。

(1) 中学校における指導と評価

中学校においては、「技術・家庭」としての評価の観点及び趣旨とともに、各分野ごとの評価の観点及び趣旨が示されている(第1表)。国立教育政策研究所より出された評価の参考資料では、学習指導要領及び解説書をもとに規準や学習活動における具体的な評価

規準が示されている。

第1表 家庭分野の評価の観点及び趣旨

生活や技術への関心・意欲・態度	生活を工夫し創造する能力	生活の技能	生活や技術についての知識・理解
衣食住や生活について関心をもち、家庭生活をよくするために知識と技術を活用しようとする。	衣食住や家族の生活について見直し、課題を見つけ、その解決を目指して家庭生活をよりよくし創造する。	生活の自立に必要な衣食住や家族の生活に関する基礎的な技術を身に付けている。	家庭の基本的な機能について理解し、生活の自立に必要な衣食住や家族の生活に関する基礎的な知識を身に付けている。

中学校においては、目標に準拠した評価を実施するために、生徒一人ひとりの学習の到達度を見取り、目標に到達するためにどのように指導を改善していくかが重要となった。実習をとまなう「技術・家庭」では、以前から観点別評価や形成的評価などが行われてきたが、今後は、評価項目を改訂の趣旨に沿って整理し直すとともに、生徒の指導に生かす評価のあり方を一層工夫する必要がある。本県においては、神奈川県教育委員会により、平成14年6月に「評価資料集 - 適正な評価活動のために -」が、また総合教育センターにおいても、平成15年3月「<実践事例集>指導と評価の一体化~多様な評価方法を取り入れて~中学校」が作成されている。

(2) 高等学校における指導と評価

ア 指導の課題

平成13年度及び14年度の調査研究協力員会における研究により、中学校と高等学校の指導内容の理解を深めることの重要性を認識した。高等学校で使用される教科書の学習内容においては、中学校で使用される教科書の学習内容と重複する部分があり、重複する内容に時間をかけて指導している場合もあること、学習指導要領の改訂ごとに、小・中学校においても指導内容が改善されていることへの認識が浅く、既習内容の把握が不十分であることなどが課題と考える。これらの課題に対しては、中学校「技術・家庭」(家庭分野)、高等学校「家庭」の学習指導要領及び解説を分析することにより、理解を図ることが可能である。また、様

1 研究開発課

研修指導主事(兼)指導主事

々な教科の学習との関わりが強いという教科の特質から、中学校における「技術・家庭」（技術分野）、社会科学（公民的分野）及び保健体育科（保健分野）などとの関連を重視することも必要である。

また、これまでの調理実習、被服製作等においては、知識と技術の習得を重視するあまり、ややもすると、実習を通した問題解決能力の育成という視点を軽んじやすい面もあった。そこで、生活を創造するために必要な知識と技術の基礎・基本をどのようにとらえ、その力をどのように生かし、問題解決能力の育成に向けた指導につなげるかが、大きな課題と考える。

イ 評価の課題

高等学校においても、中学校と同様に、各教科の評価の観点及び趣旨が示されている（文部科学省通知平成13年4月27日）（第2表）。

第2表 普通教科「家庭」の評価の観点及び趣旨

関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
家庭や地域の生活について関心を持ち、その充実向上を目指して意欲的に取り組むとともに、実践的な態度を身に付けている。	家庭や地域の生活について見直し、課題を見付け、その解決を目指して思考を深め、適切に判断し工夫し創造する能力を身に付けている。	家庭や地域の生活を充実向上するために必要な基礎的・基本的な技術を身に付けている。	家庭生活の意義や役割を理解し、家庭や地域の生活を充実向上するために必要な基礎的・基本的な知識を身に付けている。

平成14年度、小・中学校ではいわゆる絶対評価が導入されたことにより、生徒・保護者等に向けての説明が、より具体的に実施されるようになった。各教科の年間指導計画、評価の観点、具体的な評価方法等についても説明が求められるようになり、これまで以上に計画的な評価が期待されている。高等学校においても、「各教科・科目等の学習の記録の評定は、ペーパーテスト等による知識や技能のみの評価など一部の観点に偏した評定が行われることのないように、4つの観点による評価を十分踏まえながら評定を行っていくこと、5段階の各段階の評定が個々の教師の主観に流れて客観性や信頼性を欠くことのないよう、学校として留意すること」（文部科学省通知平成13年4月27日）に基づいた評価が求められる。家庭科においては、これまでも、作品製作における途中の段階での取組や工夫、実習ノートの記録等も評価し、評定の判断に加えていた。今後は、評価の観点を十分に踏まえながら家庭科のねらいや特性を勘案し、具体的な評価規準を設定するなど、評価のあり方の工夫・改善が必要である。

ウ 高等学校に生かす中学校の指導と評価の実際

中学校においては、目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）の導入とともに、個人内評価が重要視されている。学習過程における個人内評価の工夫により、学習意欲・個性の伸長が図られ、評価が指導の改善に生かされる。このような指導と評価の一体化を図る学習指導を、高等学校の教科指導にも導入して、継続性

をもたせることにより、到達目標をより高く設定することが可能になると考える。

2 新学習指導要領の趣旨を生かした教科指導

（1）年間指導計画

調査研究協力員の協力を得て、「家庭総合」（4単位）の年間指導計画を作成した。作成に当たっては、特に、以下の点に配慮した。

- ・項目ごとにまとめて学習するのではなく、生活という視点に立って、題材構成の工夫をする。
- ・中学校における学習内容の重複に配慮して、学習内容及び時間配当を考える。
- ・様々な学習形態を取り入れ、多面的な評価を可能にする。
- ・問題解決能力の育成に向け、課題を見付け、解決を図る学習形態を多く取り入れる。

（2）題材指導計画

作成した年間指導計画の中から、問題解決的な学習を含む2つの題材について、評価計画を盛り込んだ指導計画を作成した。

ア 題材「パートナーと暮らし始める」3時間扱い

- 学習項目(1)人の一生と家族・家庭イ(4)家庭の機能と家族関係
(4)生活の科学と文化ウ(7)住環境の整備
(5)消費生活と資源・環境イ(4)家計管理と経済計画

題材目標

青年期の課題である自立や男女の平等と相互の協力などについて認識する。

住居の機能・住空間の計画・住環境の整備などについて理解する。

経済計画の必要性を理解し、短期及び長期の経済計画について考える。

評価	ねらい・学習活動	学習活動における具体的評価規準	評価方法
1	就業することにより生ずる権利・義務を理解する。 ・求人票の読みとりにより、社会保険と納税について知る。 住居の賃貸契約に必要な知識を身に付ける。 ・賃貸住居情報を調べ、契約について理解する。	知：社会保険と納税について理解している。 知：住空間の計画、住環境の整備など、住居選択に必要な知識を身に付けている。	学習プリント・定期テスト 学習プリント・定期テスト
2	青年期の課題でもある自立や男女の平等、相互の協力を考える。 ・二人で暮らすことを前提に、住生活の運営について話し合う。 二人で暮らす住居を適切に選択し、住環境の整備ができるようにする。 ・話し合いを通して、住居の選択、環境整備を行う。	関：パートナーと男女の平等と相互の協力を認識しながら話し合うことができる。 思：設定された条件に従って、適切な住居を選択することができる。	観察・学習プリント 学習プリント
3	家庭経済と国民経済の関わりについて理解する。 ・給与から月間・年間経済計画を立てる。 様々な暮らし方があることに気付く。 ・話し合いの結果を全体に発表する。	知・思：家庭経済について理解し、収入に見合う経済計画を立てることができる。 技：伝えるべき内容を的確にまとめ、発表することができる。	学習プリント・定期テスト 観察・相互評価表

上記の内容で、調査研究協力員とその所属校の協力を得て、授業実践を行った。

2時間目の学習活動においては、特に、評価規準の設定とその見取りについて検討し、具体的な評価の判断基準を設定した(第3表)。

第3表 2時間目における具体的な評価規準

具体的な評価規準	評価の判断基準	評価方法
パートナーと男女の平等と相互の協力を認識しながら話し合うことができる。	概ね満足と判断できる基準 自分の意志で決定したのではないパートナーと対等に話し合いをすることができる。 十分満足と判断できる基準 互いの意見を尊重しながら、話し合いすることができる。	観察 学習プリントへの記入状況
設定された条件に従って、適切な住居を選択することができる。	概ね満足と判断できる基準 適切な住居の選択ができてい 十分満足と判断できる基準 価値観や収入に見合った住居の選択ができてい	学習プリントの記入状況 観察

実践校においては、上記の内容で評価を行ったが、この判断基準については、既習状況、生徒の実態等を考慮して、個々の学校で適切に設定することが必要である。

イ 題材「育ち合う」5時間扱い

題材目標

子どもの発達には、適切な親の働きかけが大切であることを理解する
保育における親の役割とそれを支える社会的支援について理解する。
子育てを通して親も人間的に成長することを認識し、子どもを生き育てることの意義について考える。

課題	ねらい・学習活動	学習活動における具体的な評価規準	評価方法
1	親の役割と保育について理解する。 ・親と子の関わりが子どもの人間形成や発達に大きな影響を与えることを理解する。	知：親と子の関わりが子どもの人間形成や発達に影響していることを理解し、その重要性を認識することができる。 関：親と子の関わりについて大切なものは何かを考えることができる。	学習プリント・定期テスト 観察・学習プリント
2	親の保育責任と社会的支援について理解する。 ・保育の第一義的責任は親にあることを知る。 ・児童虐待の実態を知り、親が保育責任を果たすための社会の支援のあり方や支援策等を理解する。	知：保育の第一義的責任は、親にあることを理解し、その重要性を認識することができる。 思：親が保育責任を果たすための社会における支援のあり方や支援策について理解し、適切な活用を図ることができる。	学習プリント・定期テスト 学習プリント
3	子どもを生き育てることの意義について考える。 ・身近な人へのインタビューの計画を立てる。	関：インタビューの計画を立てることを通して、子供を生き育てることについて関心をもつてとらえることができる。	観察・学習プリント
5	子供を生き育てることの意義を理解するとともに、子育てには様々な考えがあることに気付く。 ・発表を行い、聞き合う。	技：インタビューの内容をわかりやすく伝えることができる。 知：発表を聞き合うことで、子育てには様々な考えがあること、親も子どもの成長とともに成長することに気付く。	観察・学習プリント レポート

4時間目については、別掲

この題材は、「子どもを育てる立場から～子どもの

目線に合わせてみよう(24時間扱い)」の中の小題材として設定したものである。

本題材は、親の役割と保育について、身近な人へのインタビューを通して、理解を深めることを目指している。3～5時間目の内容に関しては、調査研究協力員とその所属校の協力を得て、実際に授業実践を行った。身近な教職員にインタビューをし、インタビューの結果をまとめ、発表の準備を行う4時間目の評価の具体的な規準について、次に示す(第4表)。

第4表 4時間目における具体的な評価規準

具体的な評価規準	評価の判断基準	評価方法
関：班で協力し、インタビューの内容をまとめる。	概ね満足と判断できる基準 インタビューの報告を聞き、発表に向けて話し合い活動に取り組んでいる。 十分満足と判断できる基準 インタビューの報告を聞き、感想や疑問を出し合い、積極的に話し合い活動に取り組んでいる。	観察 学習プリントへの記入状況

4時間目の授業実践では、他の3名の調査研究協力員も授業を参観し、グループ活動における評価を行った。評価項目の確認、評価方法の確認を行った後に、授業に臨み、評価を行ったことで、ばらつきのない評価を行うことができた。

5時間目の授業実践では、VTRにより分析をし、考察した。発表における評価は、技能・表現の観点を重視して行う場合が多いと考えられるが、その発表内容の評価も工夫することが必要であると認められた。

ウ 考察

「パートナーと暮らし始める」の題材指導においては、生活を創造する疑似体験により、生活を築くことや生活設計をすることの難しさを理解し、家庭科の学習で身に付けた知識や技術が生かされることに気付いた生徒もいた。事前に計画した評価は、観察及び学習プリントなどにより円滑に行うことができた。判断基準においても、概ね妥当であり、生徒の活動に教師が適切に関わることで、学習効果を上げることができた。

「育ち合う」の題材指導においては、高校生にとって身近に感じにくい「子育て」を、身近な人(教職員等)にインタビューする活動を行うことで、自分のこととして考えられるようにすることができた。また、インタビューの計画を立て、インタビューをまとめ、発表する活動は、表現能力の育成にも役立つことを認識した。3～5時間目における評価は、「パートナーと暮らし始める」の場合と同様、生徒の活動に教師が適切に関わることで、学習効果をあげることができた。

3 選択科目のシラバス作成

新学習指導要領においては、幅広い選択科目を設定し、生徒の興味・関心に応えることが求められている。「家庭」においては、専門教科「家庭」の科目及び学校設定科目が選択科目として考えられる。本研究では、

専門科目「発達と保育」「服飾文化」について、普通科の生徒が履修しやすいよう構成し直し、シラバス作成を試みた。

研究のまとめ

(1) 「発達と保育」(2単位)シラバス

学習到達目標

乳幼児の発達の特徴、乳幼児の生活と保育などに関する知識と技術が習得できます。

子どもの健全な成長を図る能力と態度が育ちます。

学習展開

時数	学習内容	学習のねらい
1 学 期	2 「発達と保育」の授業について	1年間の授業予定。保育園訪問時の注意事項や心構えを認識します。
	子どもの心と体を知ろう	
	2 保育園見学の発達	施設・設備の見学や乳幼児を観察することで興味・関心を高め、これからの学習の動機づけにします。
2 学 期	2 人間としての発達	乳幼児期が人間発達の基礎を培う重要な時期であることを理解し、この時期の人や環境の関わりを考えます。
	18 乳幼児の発達・発達	自分の成長記録や視聴覚教材を視聴することにより、乳幼児の発達・発達の特徴を具体的に理解します。また、発達・発達には一定の道筋や共通性はあるが個人差があることや、人間関係の発達には乳幼児期における「愛着関係」重要であることを認識します。
2 学 期	子どもの生活と健康を知ろう	
	26 乳幼児の生活	実習・実験を通じ、乳幼児の生活の特徴と適切な用語のあり方、生活環境の整備・健康管理と事故防止・生活習慣の形成などについて取り扱い、乳幼児の健全な発達・発達を促す生活について理解します。実際に子どもとふれあい、基本的な保育技術を身に付けます。子どもと遊びの関係を理解します。おもちゃを製作しながら幼児に対する理解を深めます。
3 学 期	子どもが育つ環境を知ろう	
	16 乳幼児の保育	保育の必要性・意義・目標・指導の原理などを理解します。集団保育と家庭保育の意義を理解し、最近増加している児童虐待の社会的背景と社会的支援について考えます。
4 学 期	4 乳幼児の福祉	製作したおもちゃで子どもと一緒に遊び、子どもの反応を見るときにも自らの成長を自覚します。児童福祉の理念や法律と制度について理解します。安心して子育てができる社会を目指し子どもの福祉について考えます。

特色ある学習方法

- ・ 保育園実習を取り入れ実践的・体験的な学習活動を行い、基礎的・基本的な知識・技術を身に付けます。
- ・ 座学だけではなく、実験・実習(調査・研究・観察・見学)を多く取り入れます。

使用教材、定期考査範囲・課題・提出物予定については、略。

(2) 「服飾文化」(2単位)シラバス

「服飾文化」についても、「発達と保育」と同様の形式でシラバスを2案作成した。1案は、被服の基本形と文化、着想に関する知識と技術を習得後、服飾文化の伝承と創造について、課題研究として扱っている点が特色である。もう1案は、「自分にあった服装」をテーマに課題を決めて製作し、課題を解決していくことを盛り込んでいる点が特色である。いずれも、発表を行うことで、学習の成果を共有することができるようにするとともに、自己表現能力の育成にも役立てることが可能である。

本年度の研究においては、新学習指導要領の完全実施を迎え、小・中・高等学校と続く、家庭科教育の指導と評価の一貫性を図ることを目指した。中学校での指導と評価のあり方の理解を踏まえ、年間指導計画及び指導と評価について工夫した題材の指導計画を作成することができた。その一部については、授業実践を通して考察した。中学校での取組を参考にして工夫した指導と評価は、生徒の学習意欲や個性の伸長に役立つことがわかった。

選択科目「発達と保育」「服飾文化」のシラバスを作成した。普通科や総合学科等における選択科目の履修単位は、2単位が多いと予想されるが、実践的・体験的な活動や問題解決的な学習をできるだけ盛り込み、実際の生活をよりよくする力の育成を目指したい。

本研究において作成した年間指導計画及び題材指導計画、評価の資料等については研究報告書としてまとめ、カリキュラム開発センターに収める予定である。

おわりに

本研究においては、4名の調査研究協力員の先生方の協力を得て、検証授業を行うなど実践的に研究を深めることができた。

今後の課題としては、中学校で展開されている具体的な指導と評価の実際について、高等学校の先生方の認識を深めること、よりよい評価の工夫を図ること、小・中・高等学校の学習内容が一目でわかるような資料を作成することなど、様々なものがあげられる。さらに、実際に新学習指導要領が実施される中、生徒はどのように変容するかを見つめていきたい。

[調査研究協力員]

県立舞岡高等学校	平坂 まゆみ
県立藤沢高等学校	坂田 千洋
県立長後高等学校	矢野 真弓
県立海老名高等学校	有我 知江子

参考文献

文部省 平成12年『高等学校学習指導要領解説 家庭編』開隆堂出版